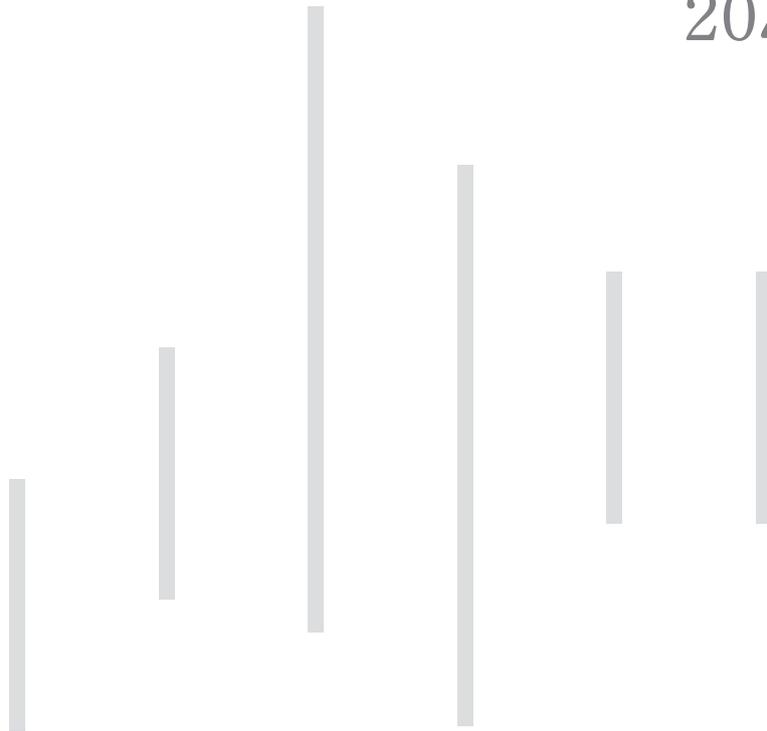


北海道立美術館・芸術館紀要 | 第30号 |

Hokkaido Art Museum Studies No.30

2020-21



北海道立近代美術館
北海道立旭川美術館
北海道立函館美術館
北海道立帯広美術館
北海道立釧路芸術館
北海道立三岸好太郎美術館

北海道立美術館・芸術館紀要 | 第30号 |

Hokkaido Art Museum Studies No.30

2020-21

北海道立近代美術館
北海道立旭川美術館
北海道立函館美術館
北海道立帯広美術館
北海道立釧路芸術館
北海道立三岸好太郎美術館

目 次 CONTENTS

●研究ノート

- 3 フランク・シャーマンの戦後日本における交友と活動の軌跡
—1948年の写真と手紙を中心に 佐藤由美加
The Relationships and Activities of Frank Edward SHERMAN in Postwar Japan Yumika SATO

●研究ノート

- 30 砂澤ビッキの芸術について—蔵書からの考察 寺地 亜衣
A Note on the Art of Bikky SUNAZAWA and His Book Collection Ai TERACHI

はじめに

1. シャーマン・コレクションの概要
 2. シャーマンとそのコレクション研究史
 3. 日本におけるシャーマンの交友と活動、1948年を中心に
 4. 1950年以降
 5. 幅広い交友の背景
- おわりに

はじめに

フランク・エドワード・シャーマン(Frank Edward SHERMAN 1917–1991)は、終戦の1945年に来日してGHQの情報教育部に所属し、印刷編集や広報の仕事を担当していたアメリカ人である。10年以上の滞在期間に多くの日本人と交友し、とくに藤田嗣治と親しく、彼の1949年の渡米に際して多大な尽力をした人物として、藤田の研究者間では知られている。

マサチューセッツ州ボストンで男8人女2人の末子として生まれたシャーマンは、幼い頃、2人の姉が繰り返し読んで聞かせたラフカディオ・ハーンの『知られざる日本の面影』(*Glimpses of Unfamiliar Japan*)から日本に憧れ、ハイスクールのときには、雑誌で目にした藤田嗣治の写真に「ボヘミアンの王様だ!」と感動したという。マサチューセッツ州教員養成大学(1936~40)やボストン美術館学校(1938~40夜間)で、印刷術、工芸デザイン、商業イラストレーションなどを学び、パリのアカデミー・グランシヨミエールにも短期留学した後、母国で広告やレイアウト・デザインの仕事に就く。1943年に徴兵され、視覚教材用ポスターのデザインや部隊向け日刊新聞の編集アシスタントをしていた。戦後、1945年に来日し、支給事務や記録係などを担当した後、1946年から1950年まで、本国の雑誌などを占領軍向けに再編集して印刷することを仕事とした。1959年に日本を離れ、退役後は、日本、アメリカ、韓国を行き来し、1991年、ソウルで亡くなった¹。

シャーマンは、生前、絵画や浮世絵、雑誌や書籍、展覧会図録などを幅広く収集していた。それらは、シャーマンの死後、親交のあった河村泳静氏によって引き継がれ、2007年以降、北海道伊達市教育委員会に寄託されている²。

2018年、札幌の北海道立近代美術館と三岸好太郎美術館で開催されたシャーマン・コレクション展にあわせて『河村泳静所蔵 フランク・シャーマンコレクション選』が発行された(図1)³。筆者は、当時、北海道立近代美術館で同コレクション選の編集と2018年4月オープンの展覧会を担当していた。本書は、2021年現在、シャーマン・コレクションに関して最も多くの絵画作品を掲載した刊行物で

あるが、絵画以外の写真や手紙などの資料については、当時、調査を進めることができなかった。本稿は、その補遺とするものである。

1 シャーマン・コレクションの概要

シャーマンは生前、日本人作家の美術品を数多くコレクションしていた。ほとんどは直接交友があった作家や、占領下の滞日アメリカ人が関心を持つことが多かった浮世絵・木版画だが、鬚嘔や篠原有司男などの1950年代以降に登場した世代のプリントアートも収集している。さらに、作品だけでなく、雑誌や書籍、マッチ箱のラベル、知人からの手紙、いつも持ち歩いていたというカメラで撮影した大量の写真など、多種多様なものが含まれる。

河村氏が受け継いだものは、シャーマンが残したコレクション全てといえるが、彼が生前収集した全絵画作品ではない。シャーマンが所蔵していた絵画は、交友の中で入手した小品が多いが、藤田作品に関しては、海外のオークションにも足を運んでコレクションしていた。しかし、そのほとんどを存命中に手放しており、代表作《五人の裸婦》は東京国立近代美術館に、シャーマンがオフィスとしていた凸版印刷株式会社(以下「凸版印刷」)板橋工場内の通称「シャーマン・ルーム」にあった《植物の中の裸婦》はポーラ美術館に、手紙を含む作品の大部分は目黒区美術館に現在収蔵されている。今のシャーマン・コレクションにある藤田関連のものは、藤田が描いたシャーマンのポートレートや書簡など、プライベートなものを中心である。また、藤田以外の作品も、いくつかは手放している(図2)⁴。本稿では、現在、伊達市教育委員会に寄託されているコレクションから写真と手紙を中心にとりあげ、1948年を中心としたシャーマンの日本での足跡を紹介する。

2 シャーマンとそのコレクション研究史

シャーマン存命中のコレクション紹介として代表的なものは、1977年の「藤田嗣治展」(小田急百貨店他)で、この展覧会は、シャーマンと平野政吉の所蔵品中心だった。シャーマンが藤田作品の多くを手放したのは、この展覧会後である。最もまとまったコレクションを収蔵した目黒区美術館では「レオナルド・フジタ 絵と言葉展」(1988年)、「藤田嗣治—東京・ニューヨーク・パリ 所蔵品を中心に」展(2010年)など、シャーマン旧蔵の藤田コレクションを紹介する展覧会を開催している。

シャーマンの手元に残る膨大なコレクションの整理は、晩年に少し着手されていた。回顧録を執筆予定だった米倉守は、次のように回想している⁵。「横浜在住の実業

家河村泳静氏から、何度も電話があり、当時勤めていた朝日新聞に河村氏がたずねてきたのは、1990年の春だったと思う。私をたずねるようにすすめたのは、私の旧知の横浜国立大学教授岸本重陳さんだという。会ってみると、フランク・シャーマン氏が日本語で回想録をだしたい、といているので相談にのってほしい、ということだった。シャーマンはボストンの自宅を引き払ってソウルにマンションを用意し、将来は東京・ソウル・ハワイを往ききして生活する設計をたてているという。興味をもった米倉は、回顧録の執筆を引き受け、「友人のエディター三好寛佳氏の協力を得て、来日の都度“聞き取り”をはじめたが、河村氏は一気にすすめるため東京にマンションの一室を用意し、回想録の資料となるシャーマンの収集品一切を、ボストンから送り込んだ」。取材する中で、米倉は、シャーマンが「作品はもらわず必ず購入したこと、日本語は話さなかったこと、いつも写真を撮っていたこと」を知り、「一般の日本人がカメラなど持てなかった時代に日本の美術界の深部に堂々と喰い込んでいるカメラ・アイに惹かれ、回想録とは別に『写真集』の刊行もすすめた」。このとき掲載候補となった写真にキャプションがつけられた。しかし、その写真集の完成をシャーマンが目にするのではなく、没後の1993年、『履歴なき時代の顔写真 フランク・E・シャーマンが捉えた戦後日本の芸術家たち』(以下、『履歴なき時代の顔写真』)が発行される⁶。本書は、2021年現在、シャーマン撮影の写真が最も多く掲載された出版物である。画家だけでなく音楽家や建築家、芸能人などさまざまなジャンルの文化人が掲載された「時代の顔写真」であるが、幅広く多彩な人々の掲載を優先したため、被写体は必ずしもシャーマンと直接的交友があった人物ばかりではなく、シャーマンとの関係が不明なものも多い⁷。この写真集の発行以降、書籍や展覧会図録でのシャーマン撮影の写真掲載が増えていく(図3~7)⁸。

写真集発行の翌94年には、米倉守と目黒区美術館の矢内みどり氏が「すべて未整理の収集品を」「ともに選び」、「フランク・シャーマンと戦後の日本人画家・文化人たち」展(目黒区美術館)が開催され、藤田以外の日本人作品、アレクサンダー・カルダー、ベン・シャーンなど計87点とシャーマンが撮影した写真約50点が展示された⁹。

2007年に北海道伊達市教育委員会に寄託された後、コレクションのほとんどに登録番号が付される¹⁰。一方、2009年に藤田の妻・君代が亡くなり、その旧蔵資料が公的機関に収蔵されて藤田研究が加速するのに伴い、シャーマン・コレクションも研究者間で関心を高めていく。2010年には、「藤田嗣治—東京・ニューヨーク・パリ 所蔵作品を中心に」展(目黒区美術館)でシャーマン旧蔵作品が、2016年の「レオナルド・フジタとモデルたち」展(D I C川村記念美術館他)では、伊達市教育委員会寄託のシャーマン・コレクション12点が紹介されている。

2018年の『河村泳静所蔵 フランク・シャーマンコレク

ション選』発行に際しては、日本人作家の絵画作品について基本情報を調査した。それまで作家名のみしかわからなかった作品、作家名すら不明な作品を1点1点調べ、作家の関係者や美術館に問いあわせた。同年4月と7月から、北海道立近代美術館、三岸好太郎美術館で、それぞれ伊達市教育委員会寄託のコレクション展が開催され、両館では翌年にもテーマをかえて展覧会を開催した。その後、伊達市や札幌市内でそれをもとにした展覧会が実施されている(p.5 展覧会一覧参照)。

シャーマン自身についての紹介は、2000年頃までは、藤田関連、その中でも1949年の日本出国前後のエピソードに限定されていたが、近年、藤田の日記や知人に送った手紙、1991年のシャーマン・インタビューなど複数の資料による多角的・客観的調査が進み、藤田とシャーマンの交友全体が紹介されるようになってきた。富田芳和は、藤田中心ではあるが、はじめて著書全体でシャーマンを取り上げ、「エピローグ」の一部で、海外で活躍する日本人画家への支援やアート・ディレクターとしてのシャーマンの仕事について触れている¹¹。また、桑原規子らによる占領下の日本美術界とGHQに関する研究の中で、シャーマンのことも言及されている¹²。

3 日本におけるシャーマンの交友と活動、1948年を中心に

シャーマン・コレクションには、400点以上の書簡と2000点近い写真がある。写真のほとんどはシャーマンが撮影したもので、ネガ、スライド、プリント、ベタ焼を貼りつけた写真帳などがあり、その一つ一つに登録番号がついている(図8)。写真は同時期に撮ったものが連番ではなく、オリジナルプリントと後年の焼き増しが混在している¹³。シャーマンは、日記などの記録を残していないため、写真からその時期や場所を特定するのは容易ではない。書簡に関しては、各国の友人知人からシャーマン宛に送られたものがほとんどで、封筒がなかったり、消印や差出人不明なものも多い。どちらも藤田関連のもの以外は、まだ大多数が公開されていない。

本稿における、シャーマン・コレクションと関連作家資料との照合調査が進展するきっかけは、荻須高德が写っている写真について2020年に稲沢市荻須記念美術館に問い合わせをしたことだった。2018年の『シャーマンコレクション選』編集にあたり、著作権処理と作品調査のため、筆者は多くの美術館や関係者に問い合わせをしていたが、コレクションに絵画作品がない荻須関係者には連絡をとっていなかった。それがこのたびの照会で多大な教示を受けることになったのである。前述の通り、シャーマンの写真が出版物に掲載されるようになったのは、1993年の『履歴なき時代の顔写真』発行以後で、同書の複写、あるいは三好企画かアートテックからの画像提供による。しかし、同美術館では、それ以前からすでにシャーマン撮

シャーマン・コレクションを紹介した主な展覧会

年	月日	展覧会名	会場	出品内容など
1977	1月4日-1月25日	藤田嗣治展	小田急百貨店他	シャーマンと平野政吉の所蔵品中心
1988	11月19日-1989年1月16日	レオナルド・フジタ 絵と言葉展	目黒区美術館	書簡40点、作品36点中34点が旧シャーマン・コレクション
1994	4月20日-5月29日	フランク・シャーマンと戦後の日本人画家・文化人たち	目黒区美術館	作品87点中86点、シャーマン撮影写真パネル約50点
2010	2月11日-4月11日	藤田嗣治-東京・ニューヨーク・パリ 所蔵作品を中心に	目黒区美術館	作品、書簡、計99点中93点が旧シャーマン・コレクション
2016	9月17日-2017年1月15日	レオナルド・フジタとモデルたち展	D I C川村記念美術館他	シャーマン・コレクションから資料12点
2018	1月13日-2月25日	没後50年 藤田嗣治 本のしごと	西宮市大谷記念美術館、目黒区美術館他	目黒区美術館所蔵の旧シャーマン・コレクション23点、目黒区美術館では他会場と異なる28点
	4月21日-6月24日	河村泳静所蔵/伊達市教育委員会寄託 フランク・シャーマンコレクション あるアメリカ人が見た戦後日本美術	北海道立近代美術館	作品、資料、計70点
	7月7日-9月2日	河村泳静所蔵/伊達市教育委員会寄託 フランク・シャーマンコレクション選	北海道立三好太郎美術館	作品、資料、計26点
2019	3月30日-7月28日	「拝啓、藤田嗣治様」-フランク・シャーマンと藤田、戦後の交友をめぐって	北海道立近代美術館	写真、絵画、浮世絵、手紙など計77点中67点
	4月3日-5月26日	フランク・シャーマンコレクション展	だて歴史文化ミュージアム	作品、資料、計76点
	4月5日-5月30日	フジタを救ったアメリカ人 フランク・E・シャーマンと戦後日本美術家たちの交友の軌跡	グランビスタギャラリー サッポロ	作品、資料、約60点 会期中一部展示入替あり
	7月13日-9月4日	フランク・シャーマンコレクション-あるアメリカ人を魅了した浮世絵	北海道立三好太郎美術館	浮世絵25点
2020	7月2日-8月25日	フジタを救ったアメリカ人第2弾 フランク・E・シャーマンと戦後日本美術家たちの交友の軌跡	グランビスタギャラリー サッポロ	作品、資料計37点
	9月12日-10月18日	フランク・シャーマン浮世絵コレクション	だて歴史文化ミュージアム	浮世絵25点

影写真を展覧会図録等に掲載していた。館長の山田美佐子氏によれば、写真はもともと荻須遺族の所蔵で、図9は、1948年10月9日、渡欧前のあいさつのため藤田を訪問したときであり、また、学芸員の後藤祐衣子氏からは、図10の集合写真の中に、当時シャーマンのオフィスがあった凸版印刷の社員がいることをご教示いただいた¹⁴。そこから関連する写真や手紙を改めて調べると、それまで場所や時期が不明だった多数の写真がすべて1948年10月9日のものであること、また、凸版印刷関係者が、シャーマンの日本での交友の広がり貢献していたことが判明した。

シャーマンが早い時期、1946年には知り合っていた日本人画家は、向井潤吉、藤田嗣治、猪熊弦一郎、恩地孝四郎、関野準一郎らである。シャーマンは、この年には、本国から送られてくるグラビアや雑誌を占領軍向けに再編集して印刷することを仕事としていた。当初は丸の内のGHQから板橋にある凸版印刷の工場まで30分かけて車を飛ばしていたが、ほどなく凸版印刷内に自分専用のオフィスをもつようになる。同社では、当時大蔵省管理工場として、戦後の新紙幣を印刷していたが、その図案選定の審査委員の一人が藤田であり、同社と関わりがあった¹⁵。また専務の山田三郎太(1948年12月より社長)は、学生時代本格的に洋画を学び、藤田とも古くから知り合いだった。シャーマンは、スタッフの一人から、藤田がすぐそばに住んでいるとの情報を得て、事前に向井が書いた紹介状を用意して藤田を訪問する。ここから藤田と親しく

なったシャーマンは、一緒に行動する中で、藤田と親交のあった人々と交友を発展させていく。

一方、恩地の長女・三保子は、英語が堪能でGHQに勤めていたため、ウィリアム・ハートネットやオリヴァー・スタットラーら、版画好きのアメリカ人が恩地家を訪問するようになり、さらに彼らは、創作版画家の家を次々と訪ねて作品を買うようになっていった¹⁶。シャーマンもそうした一人で、1946年12月の恩地家の晩餐会で、関野と出会っている¹⁷。関野は、「彼に連れられて、私は藤田さんや猪熊、脇田和などと知り合う事ができ、それから藤田嗣治に頼まれて、その絵を木版画に起こしたりした。(中略)シャーマンの通訳係は吉原グループという二世で、後に歌人の吉野秀雄の長女と結婚することになったので、私は吉野秀雄とも大変、親しくなった」と述懐する¹⁸。関野の回想からは、シャーマンとの交友によって、それまで接点のない人々が結び付いていった経緯をうかがうことができる。

シャーマン・ルーム

凸版印刷内には「シャーマン・ルーム」と呼ばれる部屋があり、頻繁にパーティーが開かれ、画家や文化人が集っていた。また、障害者を招待してのショーを開催することもあった(図11)。シャーマンによれば、山田三郎太らは、こうしたシャーマンの行動に理解を示していたという。1948年はシャーマンが日本に来てから3年が経過し、活動の場と人脈を広げていた時期であり、シャーマン・ルームは、さまざまな交流や出会いの場となっていた。この場

所を多様な人物が訪問していたのは事実だが、「シャーマン・ルームのパーティーの常連」については、詳細が不明だったこともあり、これまでシャーマンと交友のあった人々を、訪問したことすらない人物まで含めて「常連」として混同することがあった¹⁹。

では、シャーマン・ルームでのパーティーとその参加者とは、いったいどういうものだったのか。戦後まもない時期、学習院の学生だった仙波二郎は、電車の中で偶然、シャーマンと凸版印刷社員の飯田と一緒にときに出会い、後日、二人の訪問を受け親しく交友するようになっていく。仙波によれば、「いろいろな人を集める係を私がやっていた。彼は芸術家だから、キャラクターのある人でないと面白くない。従って人を集める役は大変だった」「僕や飯田が『あの人を呼ぼう。この人を呼ぼう』という具合に誘っていた。彼は大仰な『ご招待』なんて事は大嫌いだった。プランなんてない」と回想する²⁰。飯田は、船戸洪吉の『画壇 美術記者の手記』の中で、「営業課の社員でシャーマン氏の秘書」と書かれている²¹。シャーマンはもともと日本に憧れる芸術愛好家だったが、20代半ばで入隊し28歳で来日した青年は、最初から日本の画家や文化人についての知識をもっていたわけではない。シャーマン・ルームを訪問したのは、シャーマン自身が知り合った人物、(その多くは直接間接に藤田を媒介としていた)、シャーマンの意向に沿うよう凸版印刷スタッフがセレクトした人々だったといえる。

藤田と親しかった岡田謙三の日記の中で、シャーマンが交友をもった人々の名前が多く出てきている。その内容からは、藤田と一緒に行動するシャーマンが、彼らと知り合っていく経緯を垣間見ることができる²²。

[岡田日記 1947年]

1月5日「オヤジ夫妻とオギス来る。オヤジにタイ(魚)一匹もらふ。」

[同1948年]

1月10日「サワダが来る。オヤヂは一番描いた年に千枚を一年間に描いた由」

1月11日「オヤヂが来る日なので色々デコは支度したりさうじして、自分は絵を見られるので落つかず、又絵を描いて見たりした。三時頃やつきみよ夫人と荻須を連れて来た。絵を見て、悪く云はなかった。・・・色々外国行きに花を咲かせて愉快だった。オヤヂが持って来た肉でポトフを作ったりして食事」

1月25日「ジャン・コクトーの『L'eternel Retour』を見に行く。オヤヂ夫妻、オギスに逢ふ。かへり彼らとお茶を飲み、『藤田屋』で牛鍋を食べながら話す。店にオヤヂの絵が飾られていた」

2月6日「グラフィック社に行く。そこでオヤヂ夫妻、オギス、高野夫妻らと逢ふ。帰路、葦原英了、高野夫妻、東宝関係者らとコーヒーを飲み話す」

6月19日「オヤヂ夫妻がシャルマン、オギス夫婦、ドモン氏(土門拳)らをともない、ジープで来る。十二時過迄愉快に過ごす。シャルマン氏がシャーリーに手紙を出して呉れる由約す」

「オヤジ(ヂ)」は藤田嗣治、「オギス」は荻須高德、「サワダ」は澤田哲郎、「高野」は高野二三男、それぞれ藤田の後輩画家、「デコ」は岡田の妻・きみのことである²³。葦原英了(本名敏信)は、藤田の甥で音楽評論家、建築家の兄・義信とともに、後年、シャーマンと親交をもっている。コクトーの*L'eternel Retour*は邦題『悲恋』、1943年の映画だが、日本では1948年に公開されている。藤田も伊原宇三郎への手紙で1月25日にこの映画を見に行くを書いており、彼らには関心が高い作品だったようだ²⁴。岡田、荻須、高野、ここには名前がない猪熊弦一郎は、みな明治30年代生まれの東京美術学校出身者で、戦前フランスに滞在している。一回り年上でいち早く渡仏して画家として成功を収めていた藤田を、彼らは「オヤジ」と呼んでいた。戦争のため帰国し、藤田、猪熊、荻須が神奈川県小淵村藤野(現相模原市緑区)、岡田と高野は宮城県宝江町(現登米市)に疎開するなど、戦中を通じて親しい間柄だった。土門拳は、1941年頃から戦後にかけて藤田の写真を撮っており、1949年の藤田出国時の写真も土門によるものである。

村尾絢子や山口文象の手紙(V-B-3-0317、V-B-3-0032)からは、藤田を介した間接的な交友の広がりが見える。シャーマンの回想によれば、「村尾絢子さんには、フジタに会ったのとほぼ同じ頃に会った。猪熊弦一郎さんのお宅に伺ったら、そこに絢子さんが来ていた」という²⁵。村尾は、猪熊の「弟子」で田園調布の猪熊邸の「直ぐ目と鼻の先に間借り」していた²⁶。山口の英文葉書には「昨日猪熊さんに電話をし、村尾さんの具合が悪いとききました」とある²⁷。山口は、1949年、猪熊と一緒に、新制作協会に谷口吉郎、丹下健三らと建築部を設立している。シャーマンは、複数の建築家と親交があり、建築家に友人が多かった猪熊を通じて山口らと知り合った可能性が高い。当時の猪熊は、田園調布純粹美術研究室を開設し、新制作派協会会員たちと芸術家サークル「トワ・エ・モア」を結成、ダンスパーティーを催し、楽団をつくって演奏活動も行っていた。猪熊の交友の中には、画家・建築家だけではなく、小説家の石坂洋次郎や俳優の榎本健一など、さまざまな業界の人間がいて、シャーマンは、猪熊家に集う多様な仲間の一人だった。

村尾の手紙には、仕事場に社交場を併設していたシャーマンが、そこで自ら客人をもてなし、深夜になってそのまま寝泊まりする様子が書かれている²⁸。岡田の日記の中にも、シャーマン・ルームでのパーティーの様子を具体的に記述した内容がある。

[岡田日記 1948年]

6月5日「シャーマンのパーティに行く。オヤジ夫妻、オギス、其他数名、山なす御馳走を食べ飲み、九時過ぎにエキシャ(人相見)あったあとで皆は一応かへり、好感を感じるシャーマンを、オヤヂ夫婦と吾々丈で一時頃迄愉快に話し、ジープでオヤヂ宅に行き、又話を始め寝たのは二時過ぎだった。吾々はオヤヂのアトリエに寝る。」

1948年6月22日付で藤田が伊原に送った手紙の中にも同じような内容が書かれている。「この間岡田夫婦、岡、荻須やらと私等夫妻アメリカ人の処で日本人相見に各自見て貰いましたがとても面白かった事でした。」²⁹このときのものではないかと思われる写真がある(図12)³⁰。図12-1に写っているのはシャーマン・ルームをよく訪問していた土門、凸版印刷でシャーマンをサポートしていた山田三郎太、庄司喜蔵、飯田である。もう一人鈴木和夫(1981-91年社長)がシャーマンのアシスタントをしていたことがわかっている³¹。飯田がシャーマン・ルームの招待客リストを考案していた一人だったのはすでに述べたが、庄司も、シャーマンの通訳や秘書の役割をつとめていたことが、複数の手紙からわかる。

1947年3月28日付の柳宗悦(S. Yanagi)からシャーマンへの英文手紙(V-B-3-0071)がある。「先日の夜、訪問いただいた際、私たちの博物館の将来についてご案じくださった親切をけっして忘れません。(中略)博物館は4月1日に再開します。庄司さんから手紙をいただき、あなたが私を夕食にお誘いくださっていると伺いました。庄司さんは、あなたが食料をご提供くださるので、私の家での夕食をご提案されています。(中略)残念ですが棟方は東京にいません」³²。庄司が、シャーマンの誘いについて柳に相談していたことがわかる。手紙の中で、棟方志功の不在を伝えているので、シャーマンはこのときすでに棟方を知っていたか、あるいは会いたいと興味を示していたようだ。また、藤田と柳の写真(図13)も残っている。1991年に実施されたシャーマンへのインタビューは、写真を見ながら行われ、「(この写真は)柳の民藝館で自分が藤田を連れて行った。二人が会うのは初めて」と言っており、シャーマンが藤田を柳に引き合わせている³³。庄司は、1948年に藤田とシャーマンが京都に旅行したときにも同行して通訳と案内をつとめている。二人が撮影所を訪問した際、沢村貞子、実兄沢村国太郎との記念写真に庄司の姿もあり、後年、新聞上で「当時、凸版印刷の製本課長をしていた庄司さん(左端)は、知り合いの藤田嗣治画伯(左から二人目)とアメリカ人のシャーマン氏(右から三人目)を京都、大阪、奈良と案内した」と紹介されている(図14)³⁴。また、この旅行のあと、庄司は大阪歌舞伎で会った沢村宗十郎からシャーマンにもう一度会いたいと頼まれ、シャーマンに英文手紙(V-B-3-0089)でその旨を伝えている³⁵。

これまでシャーマンの広範な交友関係について疑念を抱かれることがあったが、こうして一つ一つを解読していくと、凸版印刷スタッフがシャーマンと多方面の日本人との出会いをフォローしていたことがうかがえる。日本語を解さないアメリカ人が日本人と親交を深めるためには、相手が英語に堪能でないかぎり、秘書兼通訳が不可欠で、その関係はプライベートなものになっていく。飯田と仙波は、シャーマンが凸版印刷を離れた後も交友が続いている。

藤田自身が、姿を見せることは少なかったというが、土門ら藤田周辺の何人かは、シャーマン・ルームの常連だったといえる。また、どの程度シャーマン・ルームに来ていたかはわからないが、一度は訪問していたことがわかる写真が残っている人物は多い。菅野圭介は少なくとも二度はシャーマン・ルームを訪問している(図15)。菅野が4月22日付でシャーマン宛に送った英文手紙(V-B-3-0029)がある³⁶。「親切な招待に感謝します。あなたの部屋でとても楽しい時間を過ごしました。上野公園での朝日新聞の展覧会はいかれましたか？5月10日までです。わたしの静物画を批評いただければと思います。5月半ばに毎日新聞社の展覧会のため東京へ行く予定です。」

1948年4月15日-5月10日に第2回現代美術総合展(朝日新聞社主催)、同年5月25日-6月16日に第2回美術団体連合展(毎日新聞社主催)があり、この手紙は1948年4月22日のものだとわかる。また、菅野は「こちらへもおいでください。ジープなら3時間半です」と書いて自分の住む茨城に誘っている。前述の岡田日記にも「ジープでオヤジ宅に行き」とある。交友があった人々が当時を回想するとき、「黄色いワゴン」「MG」「ジープ」という単語が頻繁に出てきており、シャーマンは気軽に日本人を乗せて送迎していた。また、庄司は、関西旅行(図14)の新聞取材に「東京での交流、関西旅行で絶大な力を発揮したのが、シャーマン氏がP X(米軍の売店)から調達したセッケン、タマゴ、パンなどの“貴重品”だった」と述懐している³⁷。シャーマンは、日本滞在中、美術史上の貴重な1ページの目撃者となることが幾度もあったが、その背景には彼が車や人、物資を自由に動かすことができる力とフットワークの軽さを持ったことがある。

図15-3には菅野、野口弥太郎、川口軌外の3人が写っており、背後には中村研一が描いた藤田と藤田が描いたシャーマンのポートレートがかかっている。3人は、同年4月に開催された第2回6人展(資生堂ギャラリー)出品作家だった。シャーマンとのつながりは不明だが、菅野の兄健介は、1947年まで凸版印刷の常務だった。シャーマンは、野口のことをインタビューでも語っており、このときだけの出会いではなかったことがわかっている。

菅野は三岸節子とも一緒にシャーマンを訪問している。二人は、1948年7月1日に、住居を別にしたまま結婚

を表明し「別居結婚」としてマスコミに騒がれた。『菅野圭介展』図録掲載写真(図6)には、「昭和23年夏」とキャプションがある。シャーマンはインタビューの中で二人の訪問を「ハネムーン」だったと言っており、そこから「昭和23年夏」としたのだろう。三岸を撮った写真(図16)は数多く、壁や床、テーブル上の食器や食物が写っており、「フローはモザイク状に組んであって、濃紺と白のペンキを塗ってあって、彼ともう一人、二世のグローブ吉原という人のベッドが置いてあり、隅に大きな電気オープンが置いてあった。」³⁸という部屋の様子がわかる。市松模様の床は、シャーマンが藤田の好みにあわせて替えたものだった。

この三岸の写真からもう一人、シャーマンが訪問した日本人画家と時期がわかる。図16-2で、三岸が手にしているアルバムに吉岡堅二の写真がある。シャーマン・ルームで他の人物を撮った写真でも、アルバムらしきものが画面に見えることがよくあり、シャーマンは、撮影した写真をアルバムにし、それを来客に見せていたようだ(図17)。菅野の写った写真(図15-3)にもよく見ると隅にアルバムらしきものが映り込んでいる。三岸訪問が1948年夏であれば、シャーマンと藤田は、それ以前に吉岡を訪問していることになる(図18)。吉岡は戦前、藤田の友人の画家・高崎剛の留守宅を借りて住んでいた時期があり、戦争中ともに従軍画家だった二人と一緒に写っている写真もあるので、藤田とは何らかの親交があったと思われる。シャーマンは、洋画家の向井潤吉、中村研一、弟の中村琢児、版画家の恩地孝四郎、駒井哲郎など、かなり多くの作家のアトリエを訪問し写真を撮っているが、藤田と一緒に写った写真があるのは吉岡のみで、他作家の写真が数カットに対して、吉岡邸訪問は残っている枚数が最も多い。日本画家のアトリエの様子や伝統的日本家屋だった吉岡邸が、興味をひいたのかもしれない。

上述以外にも、脇田和、太田耕士、平塚運一らの書簡や年賀状が残っている³⁹。洋画家に関しては、藤田とその周辺、版画家については、恩地や関野を通じて交友を広げていったと考えられる。

柳澤健と秩父宮夫妻

シャーマンの交友の中心は画家だったが、外交官だった柳澤健や秩父宮夫妻のようにさまざまな立場や職種の人物と親交を深めている。柳澤と藤田は、フランス時代から交友があり、1948年12月には、柳澤、藤田、岡鹿之助、演劇人の関沢秀隆との対談『巴里の晝と夜』が出版されている⁴⁰。また、柳澤は、ベルギー—等書記官だった1937年、ジョージ6世の戴冠式に列席した秩父宮を案内したことがあり、それ以降、夫妻と親しくしていた。柳澤は、『御殿場清話』(1948年)の中で、「一昨年」、シャーマンが「殿下にお会いしたいということでお連れして、ゆっくりお話をする機会を頂戴した」と書いているため、シャーマンは1946

年にはすでに秩父宮夫妻と面識があった可能性がある⁴¹。『御殿場清話』と『巴里の晝と夜』は、どちらも柳澤の『顔叢書』シリーズで印刷は凸版印刷だった。柳澤と藤田、凸版印刷、秩父宮夫妻、それぞれにつながりがあり、シャーマンは直接には柳澤を通じて夫妻を訪問したと考えられる(図19)。シャーマンと柳澤が夫妻を訪問した際の写真があり、何枚かはカラー写真である(図20)。秩父宮からの1948年7月1日付の英文手紙(V-B-3-0197)には「カラー写真を見たのははじめてです。天気もそれほどよくはありませんでしたが、よく写っているのはフィルムの高い品質のせいだと思います。妻はヤギと一緒に写っている写真が一番気に入っています」とある⁴²。

1948年5月2日に小田原の吉田晴風の晴風荘で開催された藤まつりは、シャーマン、柳澤、秩父宮夫妻、藤田、凸版印刷関係者が一堂に会する機会だった(図21)。藤まつりは、柳澤の企画で、演奏会曲目パンフレット(図21-11)で、『御殿場清話』の中で宮様が尺八の好きなことを述べておいでになるのを機縁に多年の心友吉田清風と計って同君庭前の古藤の花盛りの折をとし両殿下の台臨を仰ぎ「曲目の意匠が藤田嗣治画伯の手に成るものである」と書いている。柳澤と親交があったのが吉田で、吉田と親しく箏の演奏もしたのが宮城道雄だった。

秩父宮夫妻は、7月1日付の英文手紙でシャーマンを8月8日にランチを一緒にと御殿場に招待しているが、宮の体調不良によって12月によく実現した⁴³。このとき、二人は、勢津子姫をスケッチし、シャーマンは藤田と夫妻の写真を何枚も撮っている(図22)。図22-6は、シャーマンによるカラージュで、上の方の写真には図20の写真が使われている。シャーマンは、他の写真でもときどきこういったカラージュを試みている。図20と図22は、同じときの写真とも考えられていたが、河村泳静氏が、秩父宮記念公園の旧邸で、秩父宮の日記等を記録した『雍人親王実記』(吉川弘文館、1974年、p.747)の1948年12月12日に「藤田嗣治・シャーマン参邸」と二人の名前のみ記載があるのを確認した。このときの肖像画は、翌年には夫妻の手元に届き、秩父宮は、1949年2月4日付の英文手紙(V-B-3-0211)で「藤田さんが描かれた妻のポートレートをお送りいただき、本当にありがとうございました。あなたのスケッチと一緒に入っていませんでしたので、私共はひどくがっかりしています。」と書いている⁴⁴。夫妻との交友はその後も続き、シャーマンの手元には夫妻からの手紙が何通か残っており、1953年に秩父宮が逝去したときには勢津子妃からシャーマンに心のこもった手紙に対する礼状が送られている⁴⁵。

京都旅行

1948年、藤田は夏から秋、3回京都に旅行している。このときの7月の日程が岡田の日記と藤田からの手紙から確認できる。

[藤田から岡田宛手紙 1948年7月]

「来週土曜日か日曜日十七、十八に御伺いますと申し上げましたが、急にシャーマン氏と十二日月曜日 一人だけ奈良京都へ一週間旅行して来ますので十七十八頃帰京と思えますので一寸遅れて上る事になると思ひます

扱て シャーマン氏の付言

君の友人シャーリー氏よりシャーマンさんへ手紙有り、返事直ぐよこしてくれてシャーマンさんが岡田の事を心配してくれて有り難うとシャーリーさんからお礼いつて来た。(中略)右お伝えします。シャーマンさんもう一人でしょう」

[岡田日記 1948年]

7月22日「オヤヂに行く」

藤田の手紙の通りであれば、1回目の旅行は、7月12日から1週間となる。7月22日には、岡田が藤田を訪問しているの、予定通りの旅程だったと思われる。京都旅行の写真は非常に多く残されている(図23)。凸版印刷の社長が京都にクラブハウスをもって自由に使えばよいと提案したという。藤田は、京都で陶芸を手がけ、即興芝居に興じ、角倉邸で堂本印象らと写真を撮り、撮影所では沢村貞子と沢村国太郎、山田五十鈴と長谷川一夫に迎えられていた。角倉邸と沢村兄妹がいた撮影所には庄司が同行している。

荻須高德の日本人初の再渡仏

1948年10月、荻須が日本人として初めて再渡仏し、世間を賑わせた。戦前、フランスに滞在していた洋画家たちの多くは再び彼の地を踏むことを夢見て、誰が最初にそれを果たすかが人々の関心を集めていた。藤田もずっと出国するために動いていたが、なかなか許可が下りずにいる。荻須渡航前後の様子が、岡田の日記と藤田の手紙から明らかになった。

[岡田日記 1948年]

9月3日「オヤヂに行く。大声出して皆で笑って面白がったり、アメリカ行きの話で愉快だった」

10月9日「夕方オヤヂが荻須夫妻、シャーマン等連れて来る。勇気のある旅立つおぎすが立派だった。何べんも握手したかへり■用のペレーを呉れた。自分は何か■に込上げてきた。お互いうんと仕事し様と言ひ合う。オヤヂは新ちょうの上着にコスモス付けて皆を笑はせる。オヤヂはよし」

9月には、藤田はアメリカ行きを楽しみにして岡田と談笑している。10月の荻須のパリ行きは、直前まで世間にふせられており、藤田や岡田も知らなかった。出発直前の

10月9日になって、荻須は挨拶のため藤田を訪問する。

藤田が1949年6月4日付で伊原に送った手紙には、「岡田と猪熊の処へ別れにシャーマンのジープかりて連れて廻はったり」とある⁴⁶。岡田日記の「オヤヂは新ちょうの上着にコスモス付けて」という記述の通り、藤田のジャケットには花がある。図9と図10が10月9日に荻須が藤田にあいさつに行った際の写真であることはわかっている。図24-2は図9、図24-3は図10の別カットである。これらから、図24の一連の写真はすべてこの10月9日のものだということが確認できる。

岡田と猪熊が普段着なのに対して、荻須と藤田は正装であり、それぞれと一緒に写真があるのに、岡田と猪熊と一緒に写真だけでなく、藤田と荻須の写真、とくに荻須の写真が多い。荻須が藤田にあいさつに行ったのに、藤田家での写真がなく、荻須家での2人の写真があるのは、最初に藤田家にあいさつに行った荻須を、猪熊、岡田家と連れてまわったあと、藤田がシャーマンのジープで荻須を自宅に送り、最後に二人で写真を撮ったということだろう。写真の一部が以前より荻須家にあったことも、荻須のためにシャーマンが撮ったものであれば自然である⁴⁷。

荻須は、「三つになる恵美子は、叔母たちに手をひかれ、見送ってくれた友人たちと手を振りながら、M・Pの立つ波止場のほうへ消えて行った。残って一緒に船で食事した妻は、同じく見送ってくれた藤田夫妻と一緒に車で、顔をおおって無言で去って行った」⁴⁸と述懐している。これも藤田夫妻と荻須夫妻だけが船上で撮った写真があり、ここにはシャーマン本人も写っている(図25)。荻須の乗船した「ラングレースコット号は、10月12日朝六時に、正確に朝もやの中を出帆、一路上海に向かった」⁴⁹。

荻須出国については、藤田が再渡仏第一号になれなかったという文脈で藤田に関する著述に頻繁に出てきたが、岡田日記や荻須の回想とはかなり異なるものが多かった。シャーマンの写真は、二人の日記と回想を裏付けるものである⁵⁰。

藤田出国

1949年3月10日、藤田がついにアメリカへ旅立つ。この藤田の日本脱出のため、大きな後ろ盾になったのがシャーマンであり、近年まで、シャーマンについての著述は、ほぼこのときのことに限定されていた。岡田日記には、この当時の様子も書き残されている。

[岡田日記 1949年]

1月17日「ホテルにオヤヂをたづねたが留守。一時間くらいしたらデコが来、外ですし食べてもどつたらオヤヂかへる。マダムもかへりダンスなどデコが教へ、食事してシャーマン来る。」

3月9日「朝フジタから明日出立の電話を受ける。シャーマンも来て居た。十時半迄話してかへる。二人

共元気な顔をしてゐた」

藤田夫妻は、離日直前はホテルに身を隠し、シャーマンや岡田ら、数人の親しい人々のみが訪問していた。文中の「マダム」は藤田の妻・君代のことである。このとき夫婦一緒の出国はかなわず、5月の夫人の渡米まで、シャーマンは夫妻の力になっている。藤田は、アメリカから再渡仏後、ごくかぎられた日本人とのみ交友したが、岡田夫妻はその一人であり、岡田の妻・きみは、藤田没後の晩年、日本に帰国した君代夫人と交友を続けている。

4 1950年以降

シャーマンは、1950年に一度日本を離れてアメリカに戻り、美術を勉強するためフランスに渡る。藤田や荻須とも再会し、アカデミー・グランショミエールに通い、およそ1年滞在した。その後、再び来日し、1954年から翌年までアーニーパイル劇場(1946～55年、東京宝塚劇場の接収中の名称)、その後は米軍の座間キャンプで広報の仕事についていた。この時期、藤田と荻須はすでにフランスに渡り、1950年に岡田、1955年には猪熊が渡米している。再渡仏後の藤田とも手紙を中心に親交は続いたが、直接会うことが多かったのは岡田や猪熊らアメリカを拠点にした画家たちだった。

シャーマンは、その後、朝鮮半島、一時的にベトナムにも赴任している。1977年の藤田嗣治展の際には日本にいて新聞や雑誌にインタビューや原稿が掲載されているし、1983年には、荻須夫人が銀座松屋の荻須展会場でシャーマンに再会している。1988年に目黒区美術館でシャーマン旧蔵のコレクションを紹介する「レオナルド・フジタ 絵と言葉」展が開催されたときにも、シャーマンは一人で会場を訪れた⁵¹。シャーマンは、頻繁に来日・滞在し、晩年は日本にも住居をもち、アメリカからコレクションを日本に運び込み、回顧録と写真集の発行を楽しみにしていたが、1991年10月11日、入院先のソウルで死去した。

5 幅広い交友の背景

出会いから1948年までは、シャーマンと藤田、またシャーマンと日本にとっての蜜月だったといえる。シャーマンは、占領下の日本におけるアメリカ人の特権を藤田や日本人のために惜しみなく行使し、同時に自身の日本に対する好奇心を満たした。藤まつりと京都旅行は、一つのイベント写真としては群をぬいて枚数が多い。この二つが、外国人であるシャーマンにとってひととき興味深いものだったのは想像に難くない。

藤田を介して多くの画家と交友を広げていったが、一方で、柳宗悦や秩父宮夫妻のように、シャーマンが藤田に引き合わせた人々もいた。

アメリカ人であるシャーマンは、日本の画壇のしがらみと無関係で、洋画家、日本画家、版画家、音楽家、建築家と幅

広いジャンルの人々と自由につながりをもっていた。その広がりの中で、藤田と関野のように、接点がなかった人々を媒介することがいくつもあったと予想できる。秩父宮は、当時の日本では珍しいカラー写真に感激しているが、シャーマンは、食料や英語の本、化粧品、美しいカードなど、相手のために選んだプレゼントをその都度贈る心遣いを見せている⁵²。岡田が「山なす御馳走を食べ」、仙波が「外国人というのはこういう生活をするのか」と思ったシャーマン・ルーム。そこは戦後の日本人にとって夢の国であり、若きシャーマンはその主だった。仙波はまた「シャーマンさんの日本人に対する寛容な態度には、全く感激した。日本人を卑下するような事は一切無く、要するに『戦勝国の奢り』というようなものは一度も見せなかった」と述懐する⁵³。言いかえれば、当時の日本人が接する多くのアメリカ人は、そうではなかったということであり、シャーマンに送られた手紙が感謝と親愛の言葉でつづられているのは、単なる社交辞令ではなかっただろう。

シャーマンの交友と活動の広がりをサポートしていたのが、かなりの部分凸版印刷だったこともわかった。藤田との出会いも凸版印刷社員の情報からであり、もしシャーマンの仕事場が凸版印刷でなかったら、二人の出会いはもう少しおそかったかもしれないし、シャーマン・ルームという場所と通訳兼秘書、友人だった社員たちの存在がなければ、その後のシャーマンの交友の広がりも異っていたかもしれない。

おわりに

1949年の藤田渡米は、美術界において大きな出来事であり、当時からさまざまなメディアでとりあげられ、シャーマンの名前も出国のため尽力したGHQのアメリカ人として登場していたが、その尽力の内容が正確に紹介されるようになったのは、近年のことである。シャーマン・コレクションは、他の協力者の手紙などとともに、詳細を明らかにする有力な資料となった。シャーマン・コレクションの写真や手紙の中には、戦後日本に関するたくさんの時代の証言があり、今回も、1948年10月の荻須再渡仏に関する情報提供がきっかけとなり、多くの事実の判明につながった。1948年という1年だが、今回、裏付けがとれたのは、荻須が日本人として初めて再渡仏して話題になったこと、藤田の日本最後の1年だったことから、比較的記録が多かったためである。シャーマン・コレクションについては、関連作家の研究者に存在は知られているが、なかなか調査が進まない状況にある。その理由は、コレクションの多様性ともう一つ、シャーマンと各作家の交友がプライベートなもので、コレクションの歴史的意義を明らかにするには、各作家の日記や手紙といった個人資料との照合が不可欠なためだと今回再認識した。それらの資料は、作家存命中には表に出ることはなく、作家本人と夫人が亡くなった現在、慎重に調査や公開が進ん

でいる。本稿が、今後のシャーマン・コレクションの調査と研究に少しでも役立てば幸いである。

付記

本稿では、今後の照会のため、なるべく多くの写真と手紙を掲載し、登録番号を記載した。

謝辞

本稿執筆にあたり、下記の方々に貴重な資料のご提供やご助言をいただきました。記して感謝いたします。

河村泳静、北湯口孝夫、佐藤幸宏、山田美佐子

鹿島美術財団、伊達市教育委員会、特定非営利活動法人噴火湾アートビレッジ、美術の図書 三好企画

一柳友子、今村圭吾、岩田希美、川口理央、菅野晶、桑原規子、後藤祐衣子、関野準平、関野洋作、中川経子、西田真、橋秀文、山地治世、脇田智

猪熊弦一郎現代美術館、秩父宮記念公園、中西出版(株)、北海道立近代美術館、目黒区美術館

(敬称略、一部順不同)

なお、本稿は、2019年度鹿島美術財団「美術に関する調査研究助成」を受けた成果の一部である。

註

- 1 伊達市教育委員会寄託 シャーマン・コレクションV-B-9(シャーマン個人に関する資料)中のAPPLICATION FOR FEDERAL EMPLOYMENT(1948年5月1日付)より
From to(期間) Title(職名)
1943年12月~44年3月 Visual Aid Artist(視覚教材アーティスト)
1944年3月~45年3月 Assistant Editor of Daily Army Unit Newspaper (部隊向日刊新聞紙編集アシスタント)
1945年3月~9月 Supply Clerk(供給担当員)
1945年9月~11月 Records Classifier(分類記録) これ以降、任地日本
1945年11月~1946年5月 Artist
1946年5月~ Printing&Publications Specialist(印刷及び出版スペシャリスト)
『フランク・E・シャーマンAlbum』『履歴なき時代の顔写真』アートテック、1993年、pp.72-87
矢内みどり『藤田嗣治とは誰か 作品と手紙から読み解く、美の闘争史』求龍堂、2015年、pp.79-103
- 2 河村氏は、ソウル大学留学中に友人を介してシャーマンと知り合い、「韓国語と日本語と英語のつたない通訳をしているうちに、シャーマンがのめり込んでいることに少しずつ私も興味をもつようになった。シャーマンは世界中を飛び回っていたが、東京に来ると私に連絡があり、いつのまにか重宝なカバン持ち兼秘書役になっていた」という。シャーマン没後のコレクション継承と寄託の経緯については「発刊にあたって」『シャーマンコレクションに寄せて』『河村泳静所蔵フランク・シャーマンコレクション選』伊達市教育委員会、2018年、pp.4-6に詳しい。
- 3 「シャーマンと同時代の作家」154点、「浮世絵」106点を掲載。絵画作品については、作家不詳の欧米・日本以外のアジア系と思われる作品もあるが、作家情報のわかった作品のみ掲載した。写真については、被写体となる人物や時期、撮影場所の確認ができなかったため、原則、『履歴なき時代の顔写真』と同じものを、コレクションのプリント写真のデジタルデータから使用した。p.17の恩地孝四郎については、同書と同じプリント写真を発見できなかったため、別な写真を使用した。また筆者は、2018年4月1日付で現職に異動となったため、道立近代美術館での展覧会は学芸部で引き継いだ。

- 4 朝日見「SHERMANが見たもう一つの戦後の洋画史 その周辺とコレクション」『フランク・シャーマンと戦後の日本人画家・文化人たち』目黒区美術館、1994年、p.9
図2は、1978年から翌年にかけての展示即売会のDM。実際に何を売却したかは不明だが、現在のコレクションにはない作品が書かれている。
- 5 米倉守「ふたつの視覚」『フランク・シャーマンと戦後の日本人画家・文化人たち』目黒区美術館、1994年、pp.11,12
シャーマンのインタビューは、1991年2月2日、4日、5日、20日、27日の数回にわたって実施された。今回、筆者は、三好企画のご厚意でインタビューの音声データの一部を提供いただき、鹿島美術財団の助成金で英語部分の文字起こしを行った。インタビュー：三好寛佳、通訳：中川経子、2月20日と27日は米倉守も参加。すべてのインタビューに河村泳静同席。今回の文字起こし：宮内愛
- 6 フランク・エドワード・シャーマン著『履歴なき時代の顔写真 フランク・E・シャーマンが捉えた戦後日本の芸術家たち』(米倉守監修、美術の図書 三好企画製作・発売)アートテック株式会社、1993年
- 7 個々の被写体のプロフィールは記載されているが全員についてではなく、シャーマンとの関係性は、一部の人物について、シャーマンのインタビューから抜粋を掲載。原千恵子や吉田晴風のような音楽家、榎本健一や越路吹雪、山田五十鈴などの芸能人については、なぜ写真が撮られたのかこの本では不明。
- 8 図4,5,7は書籍からの転載か、アートテックまたは三好企画からの画像提供、図6は三好企画製作
稲沢市荻須記念美術館発行図録には「履歴なき時代の顔写真」発行以前からシャーマン撮影写真が使用されていた。詳細は註14参照
- 9 米倉守「ふたつの視角」前掲『フランク・シャーマンと戦後の日本人画家・文化人たち』p.12
展覧会は「フランク・シャーマンと戦後の日本人画家・文化人たち」、「小企画展 パリの日本人画家 1920年代を中心に」、「所蔵作品展 レオナルド・フジタ」の同時開催。展覧会図録の「ごあいさつ」に「写真約50点」と記載あり。87点のうち1点は個人蔵
- 10 「凡例」『シャーマンコレクション選』p.53
寄託登録総点数5,046点を下記のように分類している。
V-B-1 398点 絵画
V-B-2 475点 書籍
V-B-3 437点 手紙、葉書など
V-B-4 1,651点 写真類
V-B-5 258点 その他印刷物
V-B-6 386点 玩具・調度品
V-B-7 156点 その他
V-B-8 16点 アートテック社資料
V-B-9 56点 シャーマン個人に関する資料
その他 1,213点
- 11 ・藤田の出国に関して中心の文献。
船戸洪吉「画壇 美術記者の手記 レアリスムの行方 「藤田嗣治」美術出版社、1957年
田中穰「評伝藤田嗣治」芸術新聞社、1988年
近藤史人「藤田嗣治「異邦人」の生涯」講談社、2002年
・交友全体を紹介した文献
林洋子「藤田嗣治 作品をひらく」名古屋大学出版会、2008年
矢内みどり「藤田嗣治とは誰か 作品と手紙から読み解く、美の闘争史」求龍堂、2015年
林洋子「第七信 フランク・シャーマンへの手紙—GHQ民政官との交流」『藤田嗣治 手紙の森へ』集英社、2018年
富田芳和「なぜ日本はフジタを捨てたのか 藤田嗣治とフランク・シャーマン 1945~49」静人舎、2018年
佐藤幸宏監修「別冊太陽 藤田嗣治 腕一本で世界に挑む」平凡社、2019年
- 12 桑原規子「駐留軍施設における美術展示空間—アーニー・パイル劇場と陸軍教育センター」『近代画説23』明治美術学会、2014年、pp.31,35~37
桑原規子「戦後の在日欧米人(美術関係者)一瞥」『聖徳大学言語文化研究所 論叢』22、聖徳大学言語文化研究所、2015年、pp.374,383,385
- 13 V-B-4(写真)として登録されているものは1600点以上、写真データで5000点程度。同じ写真について複数のデータがあり、一部、番号のない写真もある。ネガとカラーズライドは、V-B-8(アートテック社資料)の中にあり約1800点。
- 14 図3,9,10は荻須遺族の所蔵で、90年代まで、撮影者名なしで使用されていたが、2001年以降、撮影者シャーマンの名が記載されるようになる。

- 15 1945年10月、当時の大蔵省は、本格的な新日銀券を製造・発行すると発表し、同時にその図案を民間印刷工場の図案専門家にも作成させることにした。図案審査委員長は大蔵大臣、審査委員の中に藤田嗣治と杉浦非水がいた。主要印刷会社から50点近くが提出され、審査の結果、凸版が入選した。1946年には、板橋・富士・大阪支社工場が通貨等製造工場管理規制により大蔵省管理工場に指定された(1952.4.28指定廃止)。『凸版印刷株式会社60年史』1961年および同社HP、山田と藤田については同書p.170、「フランク・E・シャーマンAlbum」前掲「履歴なき時代の顔写真」pp.72-87
- 16 William C.Hartnett(生没年不詳)は、1946-49年、日本に滞在、陸軍教育センターの展覧会担当ディレクターで美術品コレクター。Oliver Statler(1915-2002)は、1947年に軍属として来日して1958年まで滞在。日本の創作版画を数多くコレクションし、1956年に『*Modern Japanese Prints: An Art Reborn*』を著す。関野準一郎「版画ビエンナーレと騒動」『版画を築いた人々』精興社、1973年、p.189
- 17 1946年12月21日に「シャーマンと恩地邸の晩餐会で初めて会う」『関野準一郎展』図録、青森県立美術館、2014年、p.194
- 18 註16に同じ。p.189
- 19 前掲富田芳和「なぜ日本はフジタを捨てたのか」では、「常連だった人々」として、「画家では猪熊弦一郎、伊原宇三郎、荻須高德、岡鹿之助、岡田謙三、澤田哲郎、菅野啓介、利根山光人、野口弥太郎、三岸節子、佐藤敬。版画家の恩地孝四郎、駒井哲郎、畦地梅太郎、関野準一郎。彫刻家・イサム・ノグチ。歌手の佐藤美子、宮城まり子、作曲家・團伊玖磨、舞踏家・吾妻徳穂、邦楽家・吉田晴風、秩父宮ご夫妻、松本偵子(画家・綾介夫人)、華道家・勅使河原蒼風、タレント・藤原あき、建築家・丹下健三、芦原義信、音楽評論家・蘆原英了、天理教教祖・中山正善、ピアニスト・原千恵子、写真家・土門拳、裏千家・千宗室、書家・篠田桃紅、美術史家・土方定一、デザイナー・亀倉雄策など」とあるが、この中にはシャーマンと出会ったのが彼の職場が凸版印刷ではなく別な場所に移ってからの人々が多く含まれている。また恩地孝四郎研究者の桑原規子氏からは恩地や木版画家たちがシャーマン・ルームに出入りしていた可能性は低いとの指摘がある。シャーマンと親しかった猪熊は「凸版印刷の彼のオフィスに行ったことが無かった」(猪熊弦一郎〈談〉「シャーマンさんのシャッターチャンス」前掲「履歴なき時代の顔写真」)と述懐している。
- 20 仙波二郎「親日家」として、ハーンやライシャワー以上の貢献をした人」前掲「履歴なき時代の顔写真」pp.88-92
- 21 前掲船戸洪吉「画壇 美術記者の手記」p.146
- 22 岡田謙三研究者の北湯口孝雄氏が、現在、岡田の日記の調査を進めている。本稿で引用した日記はすべて、北湯口孝夫「FOUJITAとKENZO(後)」『絵好87・最終号』2015年(pp.13-17)による。一部「絵好87・最終号」と異なるのは、その後、同氏により加筆・訂正されているもの。
- 23 澤田は盛岡出身。旧制中学時代、藤田が盛岡へ足を延ばした折、友人の兄の紹介で藤田に師事し、卒業後、澤田は上京し藤田が日本を離れるまで子弟関係が続いた。1945年にシベリア抑留され1947年に帰国。後年、アメリカで活動。1960年にシャーマンは、ニューヨークのメルツァー画廊で澤田の個展を企画している。(六岡康光「澤田哲郎の画業」『澤田哲郎画業』)
- 24 藤田はコクトーと1920年代から親交があり、1936年にコクトーが来日したときには案内役もしている。1948年1月24日「又明日コクトーの悲恋を見ます。嗚かし又いろいろ教はる事が多いと楽しみです」佐藤幸宏(監修・翻刻)、藤原乃里子、齊藤千鶴子(校訂)『藤田嗣治 伊原宇三郎宛書簡1944-1949』p.36
- 25 前掲「履歴なき時代の顔写真」p.64
- 26 猪熊弦一郎「シャーマンさんの“シャッター・チャンス”」、前掲「履歴なき時代の顔写真」
- 27 V-B-3-0032
June 25,48
When I called to see Mr.Inokuma yesterday I head that Miss Murao suffer from consumption.(以下略)
- 28 V-B-3-0317
日本語の手紙、一部抜粋「貴君がつかれているように思います。いろいろな人が出たり入ったりします。貴君自身でお茶を入れたりお料理をしたり、そして乱れた部屋に残って眠ります。」「貴君が楽しい生活を得られるのはヨーロッパか貴君のボストンしかないと思像します。」
- 29 前掲「藤田嗣治 伊原宇三郎宛書簡1944-1949」p.36
- 30 易者(人相見)が、頻繁に呼ばれていたかは不明だが、藤田の手紙、岡田の日記は時期が近く、内容と写真の人物(岡田夫妻、荻須、藤田夫妻)が一致している。図12-3は、台紙に複数の写真を貼ったもので、写真をはがしたあとに「OKA」のメモがあり、岡鹿之助の写真があった可能性が高い。シャーマンは、インタビューでも写真を見ながらパーティーのことを回想している。図12-1の凸版印刷の人々と土門拳が写っている写真もテーブル上の花などから図12-2~5と同日のものと考えられる。
- 31 「その折私の仕事をずいぶん助けてくれたのが、凸版の社員の鈴木和夫(現凸版印刷社長)であり、彼は英語の上手な優秀な技術者だった」前掲「履歴なき時代の顔写真」p.74
庄司は、後に浅水と号して書誌学者となる。飯田のみ名前が確認できていない。
- 32 V-B-3-0071
Mar.28'47 Tokyo
My dear Mr.Sherman
I shall never forget your kindness in visiting me the other night, anxious about the future of our museum.(中略)The Museum will be reopened from the 1th of April.Yesterday I got a letter from Mr.shoji telling me that you are inviting me for dinner, he suggests me whether my own house is available to have dinner you in such a case you are kind enough supplying me some foods.(中略)I am sorry to say that Munakata is not in Tokyo.
yours Truly
S.Yanagi
この手紙の別な内容について、註12桑原規子「戦後の在日欧米人(美術関係者)一瞥」p.385でも紹介されている。
- 33 シャーマンのインタビュー
This is a folk craft museum. Yanagi's. First time meeting. I took Foujita museum.
- 34 「秘蔵写真館」『読売新聞』1988年5月11日
- 35 V-B-3-0089
August 9th '48
Dear Mr.Sherman In yeaterday,I received a postcard from Mr.Sawamura Sojuro,the old actor who we met at Osaka Kabuki.He came back to Tokyo, now.And He want to see you again. He is in his home every afternoon till 10th of this month.
「昨日、大阪で会った恒例の役者、沢村宗十郎から手紙をもらいました。彼は東京にもどってきていて、あなたにもう一度会いたがっています。今日は毎日10時まで家にいるとのことです」(1948年8月9日)
- 36 V-B-3-0029
the 22nd April
My dear friend Mr.Sherman
I thank you so much for your kind invitation and we have enjoyed very much at your room as you appreciate so deeply fine arts(中略)Have you visited the Exhibition of ASAHI Newspaper in Ueno Park? It will last till the 10th of May.I hope for criticizie my work "still life"; I intend to go to Tokio in the middle of may for the Exhibiton MAINICHI newspaper.(中略)3 hours and half by Jeep,you will find a beautiful scenery,sea sun and sand(以下略)
- 37 註34に同じ。
- 38 仙波二郎「親日家」として、ハーンやライシャワー以上の貢献をした人」前掲「履歴なき時代の顔写真」p.88 吉原は関野の述懐にもあるシャーマンの通訳。
- 39 V-B-3-0307 大田耕士からのローマ字手紙(1947年)
V-B-3-0265 堂本印象年賀状(年月日不明だが、丑の絵があり宛先が藤田の家であるため、1948年中に送った1949年元旦のもの)、V-B-3-0310 1950年年賀状 V-B-3-0312 1954年にも手紙
V-B-3-0271 関野準一郎年賀状(1949 1th記載あり)
V-B-3-0274 脇田和クリスマスカード兼年賀状(1948クリスマス記載あり)
V-B-3-0260 平塚運一からの日本語手紙(1949年12月)
- 40 柳澤健「顔」叢書(柳澤健創意・藤田嗣治構成・土門拳写真) 第三集 巴里の晝と夜」世界の日本社、1948年
- 41 柳澤健「顔」叢書(柳澤健創意・藤田嗣治構成・土門拳写真) 第一集 御殿場清話 秩父宮雅仁親王殿下、秩父宮勢津子妃殿下 共述」世界の日本社、1948年
- 42 V-B-3-0197
July 1st. 1948
Dear Mr.Sherman

Thank you so much for the colored photos and the book which you were so kind to send us the other day.

It was the first time that we have seen the color print. We think it is a really wonderful achievement and the colors came out fairly well though it was not a very fine day. My wife likes the one with a goat best.

"The Ascent of Nanda Dahi" will surely satisfy my love of mountain spirit.

If it suits you, we should be very pleased to have you at lunch here on Sunday, the 8th August.

写真裏に194*年4月23日とあり、解読困難だが、6か8に読める。「ヤギのカラー写真」から「1948」と思われる。

- 43 註42(V-B-3-0197)最後の一文に8月8日ランチとある。
V-B-3-0199
24th Nov. 1948
Dear Mr. Sherman
My doctor has just permitted me to receive visitors, (略) Please let me know a Sunday in December, which will be convenient to you to come up here, If you would not mind a cold air and on unheated house.
V-B-3-0197, 0211の英文手紙の翻訳は、伊達市教育委員会に寄託されている資料の訳文を使用した。これ以外の翻訳は本稿執筆者による。
- 44 V-B-3-0211
4th Feb 1949
Dear Mr. Sherman
Many thanks for your trouble in sending me a portrait of my wife done by Mr. Fujita, but we were awfully disappointed at being unable to find your sketch with it.
- 45 V-B-4-0207
February 4th. 1953
Dear Mr. Sherman
I thank you very warmly for your kind cable of condolence upon the decease of my dear husband Prince Chichibu.
- 46 前掲「藤田嗣治 伊原宇三郎宛書簡 1949-1956」『北海道立美術館・芸術館紀要 第27号』p. 2
- 47 すぐにフランスに送ったかもしれないし、1950年まで日本に残っていた夫人を猪熊夫妻と一緒に中村研一宅に連れて行ったこともある。1950年に渡仏し荻須と再会。その後も1955年、83年に夫人と日本で再会しており、写真を渡すタイミングは幾度もあった。
- 48 荻須高德「パリの霧と月」『パリ画信』毎日新聞社、1951年、p. 94
- 49 注48に同じ「渡航通信第一号」p. 3
- 50 前掲「なぜ日本はフジタを捨てたのか」(2018年)には「フジタの家を訪れた岡田謙三や中村研一は地団駄踏んでくやしがつた」(p. 224)という記述があるが、岡田はすでに藤田がフランスではなく渡米を計画していることを知っていたし、岡田の日記内容と齟齬がある。
- 51 「人間登場 フランク・E・シャーマンさん」『読売新聞』1977年1月13日
「藤田嗣治展開く 平野・シャーマンコレクションから」『新美術新聞』1977年1月21日
荻須美代子の手紙 1993年2月22日
矢内みどり「占領国から日本へ」前掲「藤田嗣治とは誰か」p. 80
- 52 シャーマンの手元にある年賀状や手紙には、プレゼントや美しいカードへの感謝の言葉が添えられていることが多い。
- 53 仙波二郎「親日家」として、ハーンやライシャワー以上の貢献をした人」前掲「履歴なき時代の顔写真」pp. 88-92